



AAINews

国際協力業務の現地の声・技術の「今」を紹介するレポート

八重山地域でのサトウキビ援農支援

沖縄県八重山地域には石垣島など 12 の有人島があり、その中、5 島がサトウキビ生産を主要産業としている。八重山地域におけるサトウキビ生産において、1 月から 3 月頃の刈取りシーズンには、例年、島外からの労働力として援農を頼りにしている。近年、援農者が集まりにくくなっているようであり、こうした中、現地を訪問し、状況を調査する機会を得た。

八重山の中でも西表島の黒糖はコクと甘みが強いこともあって、羊羹で有名な某老舗和菓子屋にも出荷されている。生産農家と製糖工場で計 80 名程度の援農隊が毎年必要になるが、生産組合等ではなく個々の農家で募集しており、滞在施設や賃金などの待遇も統一しきれていない。また、募集は経験者（リピーター）に優先して声をかけており、最初から広く募集すればいいように考えていたが、慣れない人が来て毎年 1 から教えるよりも、出来るだけ経験者に入ってもらいたい…というのが真情のようである。

ない端は手刈りで行う。絡み合った根元を探り当て、手斧で屈みながらキビを刈り取る作業は重労働であった。その後は、先が二つに分かれた鉋での脱葉作業だが、なかなかコツを得られずに時間ばかりかかってしまった。わずか半日で疲れ果てたが、一心不乱の作業は爽快だった。休憩中に 3 名の援農リピーターに話を聞くと、かつては別の農家を手伝っていたが、人柄や施設（部屋・食事）が気に入って、今の農家に落ち着いたとのことであった。農家によって滞在の施設や環境が異なり、中には倉庫を改築した部屋や、食事も自炊だったりする場合もあり、そうした待遇の違いが援農の定着に影響しているように見えた。



援農隊によるサトウキビ刈り作業の様子



製糖工場に集められたサトウキビ



地元スーパーで売られている西表島黒糖

半日での滝トレッキングなど、エコツアーも楽しめる

せっかくの機会なので、宿泊した民宿の農家に、サトウキビ刈りを経験させてもらった。通称「バリカン」と呼ばれる根元から刈り倒す機械を使って少しは楽になっているものの、機械が入れ

西表島には豊かな自然資源があり、奄美沖縄北部と併せての世界遺産登録を目指している。半日もあれば、マングローブ林の遊覧、滝トレッキング、水牛車など、多彩な観光も楽しむことができる。こうした地域資源を活かしつつ、また、農泊等による施設整備や都市との交流・移住も見据えた取り組みを通して、島の主幹であるサトウキビ産業の活性化につなげる道を模索していきたい。

(2018 年 4 月 吉倉利英)